

なぜヤマビルを手で殺すのか

——身体感覚と駆除の倫理——

成蹊大学 渡邊悟史

1. 目的

里山や農地の過少利用に伴い人間の生活圏へ侵出しているシカやイノシシを主な媒介者として、ヤマビルの生息域が日本各地で拡大しつつある。本報告ではヤマビル多発地帯の住民がどのようにヤマビルと付き合おうとしているのかを検討する。現状では人間の生活圏から完全にヤマビルがいなくなるということは考えにくく、生息密度の低減を図りつつ彼らとの付き合い方を考えていかざるを得ないのが実情である。東日本では秋田県、神奈川県、群馬県、静岡県の一部地域がとくに多発地帯として知られている。これらの地域では景勝地を含む山林のみならず農地や宅地にもヤマビルが現れ、行政や専門家、ボランティア団体によってさまざまな対応がなされている。ヤマビルとは陸生のヒルで、体長5mm～3cm程度。伸びると5～8cm程度になる。尺取り虫のように移動する。強靱でしなやかな筋肉を持ち、指でちぎったり、すりつぶしたりすることは難しい。活動時期は地域や天候により変動するが5月から10月ごろであり、湿気が多い場所に生息する。熱・二酸化炭素・振動等に反応するとされ、強力な吸盤で宿主に取りつく。吸血の際は血液凝固を阻害するので、出血がしばらく続く。痒みは長くて半年続くこともある。

2. 対象と方法

本報告で対象とするのは、静岡県C町でなされている「ヒル採り」という特異な実践である。これは地元の有志がハイキングトレイルを整備する一環として、ヤマビルを箸やピンセット、手でつまみ上げて塩で殺し、捕殺個体を数えるという作業である。本報告では「ヒル採り」の参与観察や当事者のインタビューにもとづいて、薬剤を用いずにわざわざ手で殺し数える実践が当事者にとって持つ意味を論じる。

3. 結果

調査の結果、彼らは薬剤散布による意図しない環境破壊を恐れ、「自分の体でできる限り」という形で駆除の規模に制約を設けていた。また、捕殺の手ごたえを通じた「何を殺したのか」という実感によって、生き物の生死や生態系へ介入している自覚を得ようとしていた。これはヤマビルが単に厄介な存在というわけではなく、人間と自然の関係が変化するなかで増えた存在であるという認識とともに、人間が環境を意図せず改変する大きな力を得てしまっているという認識にもとづく。こうしてヤマビルは当事者にとって自身の行為が自然に対して持つ影響力を自省し、自覚するための触媒となる。

4. 結論

気候変動や環境の改変、社会の変容によって現代は第六の絶滅期と呼ばれる一方、世界中で生物の生息域が変化し、人間との新たな接触領域が現れつつある。その生物には人間にとって有害であったり、不快であったりという付き合いにくい生物たちも含まれている。「ヒル採り」は特異な事例ではあるが、「何をどれだけ殺しているのか」を身体感覚によって蝕知しようとする当事者たちの試みは、第六の絶滅期のなかでの他生物種との関係における身体の役割について再考することを促している。